

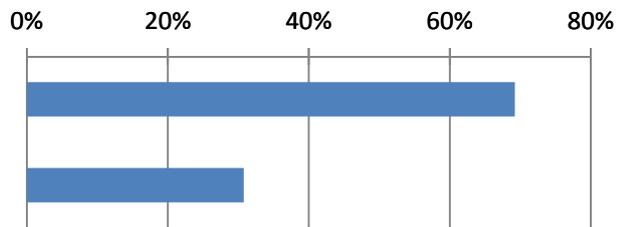
コミュニケーション関係学分野における授業での情報活用能力育成の取り組みについて

1. 回答率 8%

依頼教員数	158	(名)
回答教員数	13	

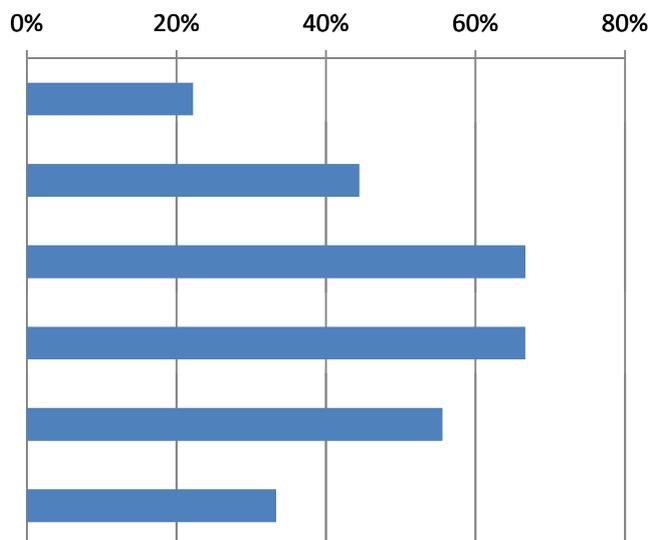
2. 情報教育育成への取り組みの割合

項目	人数	割合
実施している教員	9	69%
実施していない教員	4	31%



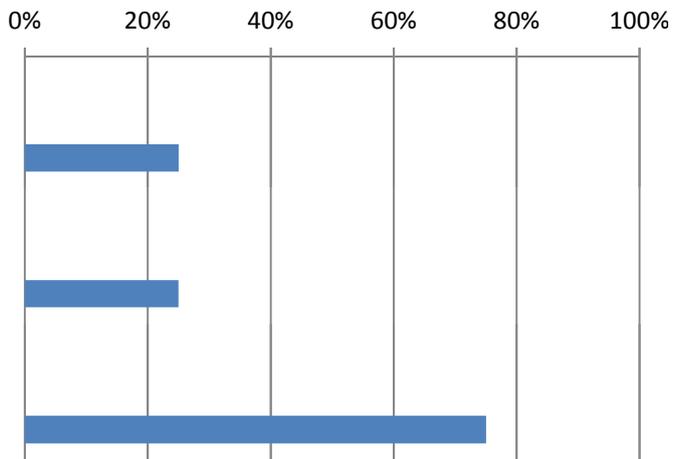
3. 情報活用能力育成への取り組み状況

項目	人数	割合
情報検索とワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトなどの機能や特徴を理解し、利用できる	2	22%
ICTを用いたコミュニケーションの特徴を理解し、適切に利用することができる	4	44%
情報倫理を理解し、信頼性の識別や情報の引用ができる	6	67%
ICTを用いて情報の検索、収集、整理ができる	6	67%
コミュニケーションの目的に沿って適切なICTを選択し、表現できる	5	56%
ICTを利用して複数の相手と意見交換するための場を設定できる	3	33%



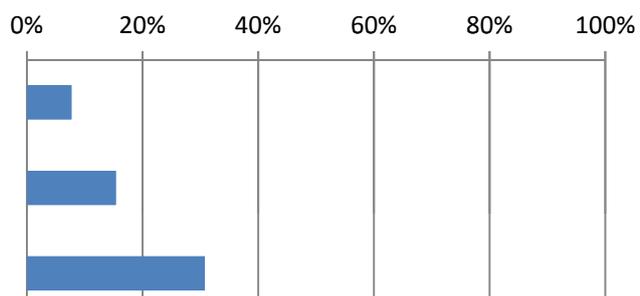
4. 情報活用能力育成を実施していない理由

項目	人数	割合
初年次・キャリア教育で実施	0	0%
授業を進める上で情報活用能力を意識する必要がない	1	25%
授業で教える時間がない	0	0%
学習の支援体制が不足	1	25%
情報活用能力を指導する力が不足	0	0%
その他（別の科目で実施）	3	75%

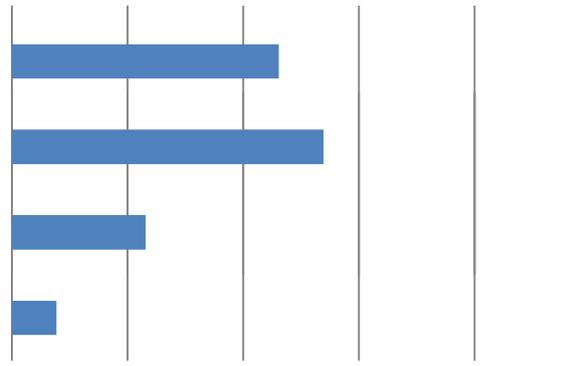


5. 今後取り組まなければならないと考えている教育内容

項目	人数	割合
情報検索とワープロ、表計算、プレゼンテーションソフトなどの機能や特徴を理解し、利用できる	1	8%
ICTを用いたコミュニケーションの特徴を理解し、適切に利用することができる	2	15%
情報倫理を理解し、信頼性の識別や情報の引用ができる	4	31%



ICTを用いて情報の検索、収集、整理ができる	6	46%
コミュニケーションの目的に沿って適切なICTを選択し、表現できる	7	54%
ICTを利用して複数の相手と意見交換するための場を設定できる	3	23%
その他（図書館利用）	1	8%



6. 教育内容の例

ジャーナリズムに関する映画やテレビ番組の録画を見せて、レポートを執筆させ、そのレポートを添削する。約100人の学生が受講しているので、個々の学生と向き合うのが不可能なため、レポートを通じてのコミュニケーションとせざるを得ない。同じ事件を世界各国でどのように報じているか。視点の差異を考えさせる。
直接的なICT技術の向上ではなく、コミュニケーション技術の進歩と社会の関わりをレビューしたうえで、それぞれのメディアが果たしている役割を考えさせることとしている。
臨床コミュニケーションは、対人コミュニケーション、主に患者、他の医療者についてのコミュニケーションを題材にしている。情報検索等は他の科目で実施している。後半の授業では、患者への情報提供を題材にするため、①学生に課題を与え、学生自身が適切な情報源を選択する、②OTC薬のコマーシャルを学生に見せることによって、顧客の購入動機を探るなどの、情報提供等における情報の活用について身につけさせている。
情報の整理と伝達のスキル(2年生のゼミ前期)、多くの情報を列挙してから3点に絞る、話す(書く)最初はテーマと予告など。各授業での予習レポート作成、予備知識のある授業への参画喚起、引用情報の出典明記。正解のない(単一ではない)実社会の認識、一つの映像教材の複数授業使用、期末試験の論述課題は正解がないものにしていくなど
コンピューター実習室を用いてアクティブラーニングの方法によるグループワークを行っています。信頼性の高い最新の情報を検索させ、それを元にプレゼン資料をつくり、発表させています。理論的・概念的な講義を行う前にこの作業をさせることによって、実質的に予習をすることにつながり、授業への主体的な参画度が向上しています。
異文化間のコミュニケーションの専門科目等の授業の中では特段強調して教えることはしてない。しかし、卒業論文の作成・指導においては、文献検索や資料の整理、アンケートの集計および分析など、ICTを上手に使うことを教えている。
インターネット資料の活用方法や引用の仕方について説明しています。

7. 大学として必要な課題への意見

<ul style="list-style-type: none"> コミュニケーションや情報に関する能力は、政治、経済、社会など専門学部に関係なく基礎的な素養として身に付けるべきと思う。したがってコミュニケーションや情報に関する学部を持たない大学においても、能力を養成するための科目を必修とするなど、大学全体として重視する姿勢が必要であることを痛感する。現状では、場当たりの講座設定となっている。 「コミュニケーション」の捉えかたが多種多様で「人間関係」から「情報通信」まで解釈されているようである。コミュニケーション学の研究教育と学士力としてのいわゆる対人コミュニケーションスキルの実技演習指導などなど、各大学で「コミュニケーション」をどう捉えてどう位置づけているか、その認識が不十分のように思われる。所属する日本コミュニケーション学会でもこれに類似する問題点が良く取り上げられているが、今だ解決合意に至っていない。 初年次教育において、特にワープロ、表計算、プレゼンテーションのソフトウェアはきちんと使えるように指導すべきである。本学でも初年次教育の中で教えているはずですが、4年生になっても満足にそうしたソフトウェアを使いこなせない学生がいることに驚かされる。特に表計算ソフトに至っては使えるという学生は皆無に等しい。 教育プログラムと社会で実践している方々との有機的な関係の構築およびその支援 教員の教育に関する意識(意欲?)喚起および向上 現状に対する経営陣の客観的認識促進 教員と職員の協力体制および意識向上 高校卒業までの教育内容の改革 家庭における親(から)の教育 必要なインフラ設備の設置及び組織的な運営 ICT導入・活用のためのサポート体制 実践例の把握、公開と評価 例にあげられていますが、学修支援システムの構築は重要課題であろうと思います。 大学内でのPCの使用には、かなり台数の制限があり、通常の授業では使用できないのが現実です。そのため、紙ベースで教えることが多いので、学生がどの程度理解、活用できるか不安なところが多い。
--

- コンピューターを用いつつグループワークを行える教室の数が少なく、いつも取り合いになっています。一对多(教員対多くの学生)の間でファイルを送受信したりといった「至れり尽くせり」の機能を持ったシステムに多額のお金をかけるより、フレックスな(キャスター付きの)机・椅子と無線LANなどでインターネットに接続するノートパソコン/タブレット端末が自由に使えるスペースの方が、情報教育は行いやすいと思っています。
- PC教育の必修化。